

人権なら

2024年4月1日

第160号

NPO なら人権情報センター

● ひと・まち・生き生き

今が人生の絶頂と言える生き様

金秀煥・ウトロ平和祈念館副館長が講演

なら人権情報センターは3月23日、三宅町あざさ苑で学習会を開催。ウトロ平和祈念館副館長の金秀煥さんが「ウトロの歴史と人々と出会う～差別と分断を乗り越えた力」と題し講演した＝写真。



金さん(写真)は、祈念館は2022年4月にオープンした。この社会では当事者が声を上げて救済されない。差別規制の法体系がなく、差別に寛容な判決が作り上げられる。2021年の放火事件は人が死んでいてもおかしくない事件だった。ヘイトクライムのターゲットは朝鮮韓国人。差別をなくすにはどうするかを歴史的に立ち戻りながら考えなければならない、と語った。

民族を前面に闘い続け、韓国政府を動かした

ウトロは京都飛行場建設の朝鮮人労働者の飯場として始まる。日韓併合後、仕事・住む場所・「徴用免除」などを謳い文句に集められた。戦後は帰れなかった人が定着。民族教育が始められたが、GHQと日本政府が強制的に学校を閉鎖した。



1989年には立ち退きを求めた裁判は最高裁で敗訴が決定したが、民族を前面に闘い続けた。広範な活動で韓国政府が動き、韓国国会で支援が決定。新しい街づくりが始まった。

「高齢の住民は、日本人を恨みながら生きてきたが、人との出会いの中で乗り越えてきた。差別され、とんでもない人生だったが、今が人生の絶頂と言える生きざまがウトロにはある」と、話した。

最終回の「町家の雛めぐり」

2007年から毎年実施もメンバーが高齢化

高取町を活性化させようと、町民たちが始めた「町家の雛(ひな)めぐり」＝写真。2007年から毎年実施してきた。この催しは、高取城の城下町・土佐街道沿いの約50軒の商店や民家が1か月間、家の人形を店先などに展示するもの。過去には約5万人を集め、賑わったことも。だが、この3月で終止符を打った。



主催者「天の川実行委員会」の中心メンバーの高齢化や、代表の野村幸治さんが療養中のためだ。連れ合いで副代表の美千子さんらが活動を支える。

観光と福祉を一体にした、このイベントは高齢者たちが企画、運営を行う。ねらいは引きこもりがちな高齢者に参加してもらい、地域を元気にすることにある。

「まちゃポ」がシニア層の元気な活動場所づくり

町家のポニー「まちゃポ」(写真)は、この活動があって生まれた。引きこもりの人や障害者が模擬店や販売活動の場所を提供してくれた。



まちゃポは雛めぐりとともに、シニア層の元気な活動場所として発展。昨年6月から始めた子ども食堂「にこにこ食堂」に加え、同年9月から、高齢者が気軽に集まり、元気になる場所「にこにこシニア」も運営する。

一人暮らしや高齢者世帯が増え、食を支援してきた弁当屋が閉店。まちゃポが引き継ぎ、「ゆいまーるキッチン」として活動する。公的支援では捉えきれない課題が多い。支える仕組みづくりを考えている。

婦人水平社と阪本数枝

佐々木健太郎・学芸員が「創立100年」で講演

水平社博物館が3月16日、御所市人権センターで公開講座。同館学芸員の佐々木健太郎さんが「婦人水平社と阪本数枝－婦人水平社創立から100年」をテーマに講演した＝写真。



阪本数枝は1894年に大阪西成郡西中島村の膠工業を営む中井家の4男4女の次女として生まれる。21歳のとき、水平社創立メンバーで同業を営む阪本清一郎と結婚。71歳で死去した。

女性水平社運動家の主張には温度差がある

数枝は全国水平社の第2回大会で「全国婦人水平社設立の件」を提案。部落女性は部落差別だけでなく、女性差別までも受けていると指摘。差別をなくすためには、男性だけでなく、女性も自覚し、男女が共に協力して水平社運動をしなくてはならない、と訴えた。

佐々木さんは、女性水平社運動家の主張として、部落の人間であることへの自覚と、運動への参加を呼びかけ、女性差別には言及しないA類。部落と女性の二重差別への立ち上がりを訴えるB類がある。

B類には、女性の自覚や自立を訴え、女性のみに向けた主張を展開するB1類。女性の自覚や自立を訴え、女性のみならず男性に向けても、男女が協力して水平社運動を行うべきだと主張するB2類があると。

部落差別と女性差別からの解放を訴えた数枝

数枝が水平社運動に参加できたのは、夫清一郎が水平社運動の中心人物であり、理解が得られやすいことと、経済状況に余裕があったことが挙げられる。

運動の表舞台から姿を消した理由は、夫の女性問題による夫婦関係の悪化と、アナ・ボル論争の激化による水平社への幻滅があったのでは、と推測する。

講演を聴き、阪本数枝が大正時代にあつて、部落差別と女性差別からの解放を訴えたことに感動した。

のんびりともものづくりを

3月は「つくってたのしもう&映画会」を実施

「みんなであそぼう会」を3月16日、三宅町あざさ苑で行いました＝写真。

今回は「つくってたのしもう&映画会」でした。

“つくって…”は、やよちゃんこと石井弥生さ



んに講師として来てもらい、くるみボタンのマグネットを作りました。映画会は「ザ・スーパーマリオブラザーズムービー」を上映しました。

参加者は幼児1・小学生6・中学生5・高校生1・保護者1、子どもサポーター5人の合計20人でした。いつもより少ない参加人数でしたが、のんびりと映画を観たり、ボードゲームをしたり、友だちとゲーム機でゲームをしたり、くるみボタンのマグネットをつくったり、それぞれが好きなことをして過ごしました。

小さな出合いや手づくり過程を大事にしたい

“つくって…”は、いろんな素材や材料にふれ、講師のアイデアや技術から学び、手づくりの体験ができます。でき上がるまでの楽しい過程を大事にします。自分で選んだり、自分で考えたり、想像することで自分を表現できるからです。想像をふくらませたり、工夫したりする人もいます。

難しいところは手伝ってもらって、できることをたのしもうというものです。つく



ることの面白さ、自分らしさを大事にします。くるみボタンのマグネットも布選びからの楽しみが広がりました。

おやつ時間は、みんなでジュースを入れ、おやつパーティー。高校生と仲良くなれた6年生はジュースを紙コップに入れるお手伝いをしてくれました。そのあとも、高校生に甘える姿に心がほっこりしました。こんな小さな出合いを大事にしたいと思います。

(子どもの居場所づくりをつくろう会・山本薫)

違憲判決後のハンセン病問題

第20回講演会で映画上映とシンポジウム

第20回ハンセン病問題講演会が2月23日、大阪府社会福祉会館であった。

第1部は、ドキュメント映像「ハンセン病療養所 入所者の今」の鑑賞。群馬県の国立療養所栗生楽泉園で暮らす北野貞晴さんへのインタビューを軸に構成された映画だ。



昨年、100歳を迎えた北野さん。14歳でハンセン病を発症。大阪を離れ、多摩全生園を経て栗生楽泉園へ。86年間に及ぶ生活や思いから「今」を描いた。

「これまで」と「これから」をつなぐ、をテーマに

第2部は「違憲判決後のハンセン病問題」～「これまで」と「これから」をつなぐ、をテーマにシンポジウム。

コーディネーターの坂元茂樹・世界人権問題研究センター理事長が趣旨説明。1996年に「らい予防法」が廃止され、2001年に「違憲判決」。続く「家族訴訟」判決を経て20年。2023年の「ハンセン病に係る偏見差別の解消のための施策検討会報告」を踏まえ、「これまで」を振り返り、「これから」の社会につなぐ糸口となること、このシンポのねらいだと語った。

岡山育夫(仮名)さんが発言。1953年、大阪生まれ。関西退所者原告団いちよの会の共同代表を務める。発病して愛生園に入所。邑久高等学校新良田教室に入学。療養所を退所。「社会復帰」後の仕事や結婚をめぐる偏見差別の苦しさや、「わが子にも病歴を明かせない」という切ない現実を語った。

入所者の高齢化と後遺症の進行の対応が課題

屋猛司さんが発言。1942年生まれ。鹿児島出身。2006年から邑久光明園入所者自治会会長を務める。2013年から全国ハンセン病療養所入所者協議会会長として活動。喫緊の課題は入所者の高齢化と、後遺症の進行などへの対応だ。退所された人が再入所

する状況がある。入所者の平均年齢は88歳を超えた。最後まで安心して生活できる療養所の実現に向けて取り組んでいると語った。

支援センターが社会復帰と生活環境づくり

「福祉運動・みどりの風」の原田恵子さんが発言。ハンセン病市民学会の事務局長を務める。ハンセン病支援センター設立の歩みを説明。今後の課題は入所者の社会復帰と生活環境づくりなどと指摘。偏見・差別の解消のために、①人権教育・社会啓発②相談窓口の活性化③「検討会報告」の活用を呼び掛けた。

吹田市人権政策室長の高島博さんは、同市のハンセン病問題に関わる啓発の取り組みを紹介した。

ハンセン病支援センターコーディネーターの瀧川晴日さんは、複合マイノリティとして自己紹介。同支援センターの事業を紹介し、事業への関わりを通じて感じ、考えてきたことを話した。

「かいほう塾」が3年生歓送会

33人が参加しバーベキューで思い出づくり

「かいほう塾」は3月14日、三宅町人権センターで、3年生歓送会を開いた。

卒業式を前日に終えた3年生18人をはじめ、1、2年生、スタッフ、ボランティアの総勢33人が参加した＝写真。



かいほう塾に参加する今年度の3年生は、25人と多く、学習に、交流に、と元気よく過ごしてきた。下級生とも親しく接し、塾の活動を盛り上げてきた。

歓送会を開くのは今回が初めて。卒業に際し、思い出に残るものとして、バーベキューをやりたいとの声が多く、保護者の了解も得て実施。全員が大喜びし、記念撮影をしたり、ツーショット写真を撮ったりもした。

塾では、今後も、学習とともに、お互いの関係を深め合う取り組みを企画したいと考えている。

近代郡山を築いた人々を想う

吉田栄治郎さんが郡山歴史フォーラムで講演

第26回こおりやま歴史フォーラム(大和郡山市制70周年)が2月17日、やまと郡山城ホールで「近代郡山を築いた人々」と題してシンポジウム。吉田栄治郎さんと奥本武裕さんが記念講演をした。



吉田さんのテーマは「郡山の近代化—その原動力と実現したもの」。金魚の養殖、県初の旧制中学(現郡山高校)、第六十八国立銀行の創立、紡績会社の設立に旧郡山藩士が関与していたことを話した。

金魚の養殖は郡山藩士内職として飼育販売

金魚の養殖は郡山藩士の内職として飼育販売。明治に入り、観光客の土産として販売を広げ、海外にも販路を広げた。生産量は戦前、全国の6割を占めた。

1893年の旧制中学の創設には、奈良町、今井町も名乗りを上げた。だが、柳澤保申(やすのぶ)が二の丸御殿の土地2300坪と5000円を寄付。設置が決ま

編集後記 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

キンビールが経済学者、成田悠輔を広告に起用した。成田は「高齢者は集団自決すればいい」と言う人物。たちまち、不買運動が起きた。キリンは広告を取り下げた。でも、テレビ界は彼を登用し続ける。伊藤忠商事はガザ爆撃に関与するイスラエルの軍事会社と協力関係にあった。当然、抗議が殺到。関係を解消した。大企業はイメージを重視する。対応は素早い。悪質なのは自民党。アイヌや女性などへの差別発言を繰り返す杉田水脈を国会議員として重宝する。極右へのおもねりと、何よりも国民の分断統治に利用したい考えなのだ。批判の声を集中することが重要だ。

った。郡山中学の図書館は全国一の蔵書量を誇る。大和を代表する儒学者、谷三山(たにさんざん)の蔵書を所蔵していたが、火災で焼失した。

第六十八国立銀行の創立は1873年の「国立銀行条例」に伴い、県では郡山町に開業。経営陣はほとんどが旧郡山藩士。1928年に本店を奈良市に移し、南都銀行と改称。現在に至っている。



郡山紡績会社は1893年、旧藩の家老や藩士、呉服商などが発起人となり、設立。江戸時代には、木綿屋23人、綿屋75人がいて、郡山を代表する産業だった。だが、経済恐慌などに見舞われ、大阪の摂津紡績(のちの大日本紡績、ユニチカ)に売却した。

地域発展に尽力した住民の姿から何を学ぶか

奥本さんは「小泉の近代」について、旧小泉藩の略史と、片桐村の成立、郡山市との合併経過などを通して話をした。初代藩主片桐貞隆は戦国武将、片桐且元の弟。二代貞昌は石州流茶道の祖で、慈光院を創建。小泉陣屋は小泉城跡に造られた。小泉藩は1871年の廃藩置県により11代で消滅した。



片桐村は1889年、10か村が合併して成立。1957年には郡山町と合併し大和郡山市となる。初代村長村戸賢徳は小泉藩の資金調達を担った。一度は引退。大和小泉駅設置のため復帰。実現させた。小学校の拡充、ため池の築造、道路橋梁建設も行った。

最後に、私たちは地域の発展に尽力した地域住民の姿から何を学ぶのか。地域社会の未来像をいかに構想し、実現していくかが問われている、と語った。

ニュースレター「人権なら」

発行:NPO法人なら人権情報センター
〒636-0223

奈良県磯城郡田原本町鍵301-1

TEL:0744-33-8585/FAX:0744-32-8833

E-mail:info@nponara.or.jp

http://www.nponara.or.jp/